

呑川とは＝呑川の基礎知識

「呑川の会」会員から寄せられたレポートをそのまま5ページに分けてご紹介しています。
呑川の概略(基礎知識)です。(1997年4月記述)

1.現在の呑川

呑川の源流はいくつかあるが、いずれの水も呑川の下流までは行けない。平常時はすべて途中から下水道へ入ってしまうからだ。では、私たちの見ている水は？

2.1950年頃の呑川

農業や漁業など人のくらしを支えた呑川。
流路を変え、川床を掘り下げ、みんなの生活から離れた。

3.呑川と水害

古来、呑川はたびたび氾濫した。
都市化とともに格段に凶暴になっていったように見える。だがそれは、土と緑を失った呑川の「反乱」でもあったのだ。

4.呑川と水質

呑川に魚の影が戻ったのは最近だ。コイやボラなどは誰でもすぐ見つけられる。
BODが10mg以下になると生き物に目立った変化が感じられる。

5.呑川と親水・結言

都会の中でいつも身近に生き物の営みが見られる呑川。
だが、川床まで5mもある。頑丈なフェンスに囲まれた、よそよそしさは何とかならないか？

現在の呑川

「呑川の会」会員から寄せられた呑川についてのレポートです。

(1997年4月記述)

このページは「呑川とは」の第一パートです。

呑川は世田谷区、目黒区、大田区の3区にまたがる二級河川で、典型的な都市河川のひとつである。

まず呑川の本流は新玉川線桜新町駅付近から暗渠で始まる。高速3号線から下流の駒沢通りまでは暗渠の上に親水公園が作られている。

ポンプで水を循環させ水生植物を植えたせせらぎがあり桜並木となっている。東横線都立大学駅付近で、まず駒沢公園付近から流れてくる駒沢支流を合流し、次いで目黒区東が丘(旧芳窪町)付近から流れてくる柿の木坂支流を合流する。

いずれの支流も暗渠になっているが、やはり桜並木の続く緑道になっている。そこから下流の大井町線緑ヶ丘駅付近までもやはり暗渠となっているが、桜並木の続く緑道となっている。緑ヶ丘駅付近で川が姿をみせる少し手前で、九品仏のある浄真寺付近から流れてくる九品仏川を合流する。これも暗渠になっているが、自由ヶ丘駅付近までは緑道になっている。なお浄真寺裏の池は現在では埋め立てられて公園になっている。

以上いずれの暗渠も世田谷区や目黒区は現在は下水幹線として使用している。

九品仏川が合流する少し手前の東京工大付近で、新宿区にある落合処理場で高度処理した下水処理水が平成7年度から放流されている。なお呑川以外に渋谷川や目黒川にもこの下水処理水は川の浄化のために放流されている。

緑ヶ丘から下流は長かった暗渠からやっと川が姿をみせるが、土手のある川ではなく3面コンクリート張りの実用本位の川が続く。

ここから下流の池上本門寺付近までは潮の満ち干きの影響はなく、コンクリートの河床ながらさらさらと水が流れるので、適当に空気に曝され水の浄化になっている。

また河床に小段差をつけ、積極的に水を浄化していると思われるところもある。なお道路下に作られた下水路が大雨のとき流しきれない下水を呑川へ吐き出すための下水吐が所々に大口を開けている。こうした下水吐は感潮域では増水した川の水が逆流するおそれがあるので設けられていない。

中原街道にかかる石川橋のところで、中原街道の地下を多摩川まで通じる地下放水路が設けられている。呑川が増水したとき一定水位以上の水が越流堤を越えてこの地下水路に流れ落ちる。

越流水は地下水路を多摩川の沼部付近まで自然流下し、そこから多摩川へ排水する。

新幹線をくぐった少し下流の道々橋付近で、洗足池から流れてくる洗足用水を合流する。現在この用水には湧水を利用してせせらぎを復活させ、用水沿いに散策路が作られている。

以前は田に水を引く都合からか、一番低い地面より少し高めのところを流れている。呑川へ合流するところでは暗渠となり、下水吐から水が流れ込んでいる。

道々橋付近から第二京浜国道にかかる池上橋までの間には、川底に水鳥がまるための石や魚が住むための窪みが作られたりしており、3面コンクリート張りから解放される箇所がある。

この辺では現在河川工事が進められているが、従来は実用一点張りの設計であったが、最近は親水への配慮もされるようになった。

池上本門寺付近から下流は感潮域に入る。以前に比べ最近は少し川の水がきれいになったので、河口からボラや鯉が遡上してくるのがみられるようになった。またこれらの魚を追ってかカルガモやユリカモメやカワウが飛来してくるようにもなった。

池上通りにかかる堤方橋より少し上流で、旧六郷用水が南から北へ縦断するような形で注ぎ込み大森方面へ流れた用水跡が残っている。この旧六郷用水は現在は埋め立てられて緑道にしたリせせらぎを復活したりしている。

西蒲田の双流橋から蒲田駅手前のJR鉄橋にかけては、平成8年度まで屋形船の形をした曝気装置が4台川面に浮かべられていた。この辺は川の水が淀み以前は悪臭がひどかったので、この装置で川の水に空気を送り込み浄化していた。

また、この辺には川面に浮かぶゴミを集めるためのゴミフェンスも設置されている。

第一京浜国道にかかる夫婦橋の少し下流で、旧呑川は北東の方向へ蛇行しながら流れていたが、現在はこの河川敷は埋め立てられて緑道になっている。

新呑川はこの付近から川幅もずっと広くなり、一直線に真東へ京浜工業地帯の工場群の間を貫いて東京湾まで流れている。

以前はノリ養殖用の小舟がたくさん係留されていたが、現在は釣り船に代わっている。また以前夫婦橋のたもとと産業道路にかかる新呑川橋のたもとには舟からの荷の積み降し場があった。

現在後者は傾斜のゆるやかな護岸になった親水公園に作られている。

夫婦橋から河口までは、川のまわりの土地の高さが水面とあまり変わらないので、大雨による増水のほか高潮にも備えるため、護岸はいわゆるカミソリ堤防になっていて、川沿いを歩きながら川面をみることはできない。

1950年頃の呑川

「呑川の会」会員から寄せられた呑川についてのレポートです。

(1997年4月記述)

このページは「呑川とは」の第二パートです。

明治時代に作成された旧陸軍陸地測量部の地図をみると、当時の呑川は田圃の中を蛇行しながら流れており、主として灌漑用水として利用されていたと思われる。またその水源は豊かな地下水を含んだ関東ローム層の台地の崖からの湧水が主だったと思われる。

池上に戦前から住んでいる人の話では、昔の呑川の川幅は現在よりずっと狭く土手は桜並木になっており、子供が川へ入って魚取りもしたという。こうした風景は昔の写真にも写されている。

(左下から) 蒲田駅手前のJR鉄橋のもとに旗染屋があるが、神田川と同じように呑川の清流で布の糊を洗い流していたのかも知れない。

私は戦後の昭和24年に西蒲田の双流橋のそばに引っ越してきた。すでに一応の河川改修は済んではいたが、付近には未だ往時の面影が随所に残っていた。池上橋から上流の方には一面の畑が広がっていたし、私の家の付近にも畑や沼地があちこちに点在していた。川は土手になっており春にはタンポポが咲いた。双流橋のそばには大森方面へ水を引くための取水堰の跡もあった。

水はきれいとは思わなかったが、それでも淀むようなこともなく流れていたし、川底に溜まるのはヘドロではなく土砂だったので、ときどきスコップで浚ったりしていた。双流橋は木の橋で、増水すると橋脚に水草がたくさんからみついた。

昔、堤方橋の少し下流から双流橋の少し下流まで川の真中に中土手があり、流れが2本になっていたのが双流橋という名前が付いたものと思われる。

夫婦橋から下流にはノリ養殖用の小舟がたくさん係留されており、まわりの空地にはノリをよしに貼って天日干しにしている風景があちこちにみられた。

もっともロマンチックなことばかりではなく、大雨が降ると呑川へ注ぎ込むドブ川の水が道路に溢れ出して歩行に困ることがよくあった。また沼地や溝が多いこともあり蚊が多く、かやは絶対必需品であった。

戦後になって、以前は田圃や畑や沼地だったところに住宅や工場がたくさん建ち始めた。そのため降った雨は田圃や沼地に溜まったり地面にしみ込み地下水となったりしないで、一度に川へ流

れ出すようになった。道路の舗装が進んだこともこの原因となった。

その後下水道が普及して通常時の家庭や工場の排水は川へ流れ込まなくなったが、大雨時の雨水は捌き切れず、一気に下水吐から川へ流れ込む。

なお生活水準が向上し水洗トイレや家庭風呂などで水道水の使用量がふえ、最近では都市河川の流域に降る雨量に匹敵する水量が多摩川や利根川などのダムから水道水として都市河川の流域へ流れ込んでいるのだそうだ。

呑川と水害

「呑川の会」会員から寄せられた呑川についてのレポートです。

(1997年4月記述)

このページは「呑川とは」の第三パートです。

戦後になって、以前は田圃や畑や沼地だったところに住宅や工場がたくさん建ち始めた。そのため降った雨は田圃や沼地に溜まったり地面にしみ込み地下水となったりしないで、一度に川へ流れ出すようになった。道路の舗装が進んだこともこの原因となった。

その後下水道が普及して通常時の家庭や工場の排水は川へ流れ込まなくなったが、大雨時の雨水は捌き切れず、一気に下水吐から川へ流れ込む。

なお生活水準が向上し水洗トイレや家庭風呂などで水道水の使用量がふえ、最近では都市河川の流域に降る雨量に匹敵する水量が多摩川や利根川などのダムから水道水として都市河川の流域へ流れ込んでいるのだそうだ。

過去の呑川の水害としては、昭和24年8月のキティ台風、昭和33年9月の狩野川台風、昭和34年9月の伊勢湾台風、昭和40年8月の台風17号によるものが大きかったと思うが、特に昭和33年の狩野川台風による水害がひどく、呑川流域に多くの床上浸水を出した。

過去の呑川の水害としては、昭和24年8月のキティ台風、昭和33年9月の狩野川台風、昭和34年9月の伊勢湾台風、昭和40年8月の台風17号によるものが大きかったと思うが、特に昭和33年の狩野川台風による水害がひどく、呑川流域に多くの床上浸水を出した。

戦前にある程度蛇行部分を直線化したり、川幅を拡張したりする河川改修はなされてはいたが、流域の開発スピードに追いつけなかったと思われる。

石川橋・池上橋間、夫婦橋・河口間は水路が一直線になっているが、戦前改修されたものと思われる。

昭和33年9月の狩野川台風による水害が特にひどかったので、その後東京都は時間雨量50ミリまでは対抗できるようにと、川幅を広げたり川底を掘り下げたりして川の断面積を大きくする河川工事が進められた。

川の流域には既に住宅や工場が密集していたので、護岸は最初は木柵、次いで鋼矢板、最終的には堅固なコンクリートの垂直護岸が作られた。

中流域ではその後更に川底の中央部を凹型に掘り下げて、川の断面積を大きくしている。

橋も橋脚のないものに架け替えられた。狩野川台風時、西蒲田一帯の浸水がひどかったのは、呑川にかかるJR鉄橋の橋脚に上流から流れてきた畳が引っ掛けて水の流れを塞ぎ止めたのが原因だと聞いている。

また中原街道の地下に多摩川へ通ずる放水路が作られ、増水した水の一部はそちらを通して流れるようになった。

なお、神田川では川沿いに建物が密集して川幅を拡張できないので、川に並行して走る道路の下に分水路(高田馬場・江戸川橋・水道橋・お茶の水の4分水路)が作られ、増水した水を捌いている。

川の断面積が格段に大きくなったことと放水路も完成したことが大きな理由と思われるが、最近では呑川による水害の話はあまり聞かなくなった。

しかし自然現象のことであるから、時間雨量が50ミリ以上になることも充分ありうる。行政に対しては更に高い目標の水害対策を期待すると共に、流域住民としても万一の水害に対する心構えをすることも必要だと考える。

今後の水害対策としては、川の流量をただ大きくすることだけを考えるのではなく水の本来持つ自然の循環サイクルとよく調和させた、いわゆる総合治水の見地から進めるべきであろう。

呑川をはじめ一般に最近の都市河川は、通常時は水がほとんど流れないのに、一度大雨が降ると短時間のうちに大量の水が川へ流れ込む傾向がある。そこで以前の川のように大雨が降ってもすぐ大量の水が川へ流れ込まないようにする方策はないものか。

そのためまず考えられることは、川の上流域ではもっと保水や遊水に心掛け、以前のように降った雨は極力地面にしみ込ませたり溜めたりすることである。

そのような方策として、屋根に降った雨水を雨樋を通じて一旦地下に埋めた浸透ますを通してから下水道へ流すようにしたり、小まめに透水性舗装にしたりする工夫がなされている。

また公園や運動場のような広いスペースのところへ、増水した川の水を一旦溜め込み、水が引いてからもとの川へ流すような工夫をしたところもみられる。

善福寺川沿いの和田堀公園や石神井川沿いの武蔵関公園などにこのような例がある。一番目を見張る例は妙正寺川沿いの中野哲学堂前にある多目的調節池である。高層住宅の一階部分は柱だけで、増水した川の水は越流堤を越えて一旦ここへ流れ込むようになっている。

また環7の地下に巨大な地下トンネルを作り、神田川が増水した水を立坑を通じて一旦ここへ溜め込み、水が引いてからポンプで汲み上げもとの川へ放水する工夫もされている。将来計画はこの地下河川を東京湾まで延長するのだそうだ。

以前下水道が無かった頃は、庭に穴を掘り生活排水はそこへ流し込み地中へ浸透させた家が多かった。また大雨が降ると雨水は沼地や溝などに溜まったものだった。

総合治水と言われているが、私には以前の方法が見直されているように思える。従来山林や農地だったところを大規模に開発する者に対しては、何らかの保水や遊水を義務づける行政措置も必要だと思う。

両国国技館では屋根に降った雨水を地下タンクに貯水し、水洗トイレなどの雑用水として使用している。水道水の節約、下水への負担軽減、防火用水とかなり理想に近い姿と思われる。

一方流域住民としても常に水害に対する心構えを持つことも大切だと思う。浸水を川の立場からみれば、もとは川の領分とも言える低い土地に、あとから人が住みついたと言えなくもない。

呑川でも以前はよく浸水したので家を建て替えるとき床を少し高くしたり、大会社のアパートや寮が建つとき土盛りしたりする例がよくみられた。もっとも土盛りは遊水の見地からはまずいので、鶴見川中流域などでは規制対象になっているとのことである。

最近地下室に浸水して配電盤がだめになった例をよく聞かすが、地下鉄の入り口のように地下室への入り口を少し高くするか、そのような大切なものは水が漬くような場所には置かないことだ。

神田川や目黒川などでは未だ浸水が多いので、川の要所要所に水位計を設置して自動的にサイレンで注意報や警報を出して流域住民に知らせるようになっている。

なお流域へ新たに転入する人へは、過去の浸水実績を事前に知らせて、川に対する心構えを持ってもらった方がよいと思う。

上流域の人は大雨時には風呂の水を流さないような一寸した心使いもしてほしい。

呑川と水質

「呑川の会」会員から寄せられた呑川についてのレポートです。

(1997年4月記述)

このページは「呑川とは」の第四パートです。

呑川が昔農業用水として利用されていた頃の水源としては、湧水と雨水が主であったと思われる。

関東ローム層の台地は地下水を豊富に貯えることができ、その台地のあちこちの崖からは地下水が湧き出し、呑川に注ぎ込んでいたと思われる。

また降った雨も全部がすぐ川へ流れ込むのではなく、かなりの水量が田圃に一時溜まり、その間に地下にしみ込んだり蒸発したりしたと思われる。

当時人家からも生活排水は川へ流れ込んでいたが、水洗トイレや洗濯機は未だ普及しておらず、流れ込む水量は現在ほど多くは無かったと思われる。

トイレは汲取式で糞尿は畑の肥料として利用されることが多かったし、洗濯は川ですること多かった。

本来川はさらさらと流れ下る間に空気に曝されるなどして、自己浄化する能力を持っている。

戦後になって流域に住宅や工場がたくさん建ち始めると、家庭排水や工場排水が大量に川へ流れ込むようになり、だんだンドブ川化してきた。

昭和24年に蒲田の呑川のそばに引っ越して来たとき、大きなドブ川だと思ったが、それでも川の自己浄化作用はいくらか残っていたので、悪臭がすることはなかった。ただ窓を開けると蚊が入ってくるのでカヤは手放せなかった。

しかし高度成長期に入ると、川の水質はますます悪化し悪臭がするようになり、蚊も住めないようになってきた。

そうなると川は厄介者扱いになり、ゴミを捨てる人もいた。ただそのころは未だ下水道が整備されておらず、大雨が降ると増水した水でゴミを押し流し、水の汚れも一時的に薄められた。

当時は、下水道が整備されると下水が川へ流れ込まなくなるので、川の水質は改善されるかと期待していたが、正直のところ少々期待外れであった。

それはひとつには地下水の水位が下がり護岸はコンクリート張りになり湧水が川へ流れ込まなくなったこと、もうひとつには雨水はすべて一旦下水道に取り込まれ、雨水が川へ流れ込まなくなったことである。

そのため以前は通常時でもある程度の水量が川を流れていたのが、通常時にはほとんど水が流れなくなり、川は枯渇化してしまったのである。

すると川の中流の感潮域では水が淀み、墨を流したように水が真黒になったり、硫化水素が発生するのかひどい悪臭を放つようになり、夏はとて窓など開けてはいられないような状態となっ

た。

ところが通常時はほとんど水のない川も、一度大雨が降ると、川の護岸の随所に開けられた下水吐から、下水道にたまったヘドロもろとも大量の下水が川へ流れ込む。

現在の下水道は合流式で作られているので、大雨で処理しきれない下水は川へ流すようになっているからだ。

このような中流の感潮域での悪臭対策として、平成3年度に双流橋から蒲田駅手前のJR鉄橋までの間に屋形船の形をした曝気装置を4台設置して、川の水へ空気を送り込み水の浄化を始めた。

また平成7年度からは、新宿区の落合処理場で高度処理した下水処理水を呑川上流の東京工大付近で放流する対策もとった。

この二つの悪臭対策が功を奏して、最近水質はかなり改善され、CODで10PPM位までになった。

ボラや鯉が泳ぐようになり、またそれを追ってカルガモやユリカモメやカワウなどが川面にくるようになった。

川に魚や水鳥がくるようになると、川をのぞき込む人や水鳥に餌をやる人が多くなり、川へゴミを捨てる人も心持ち少なくなったような気がする。

ただ残念なのは、大雨で下水吐から大量の下水が川へ流れ込むと、悪臭のするスカム(浮遊汚泥)が川面を埋めつくし、また可哀想にも大量の魚が窒息して浮き上がることである。

今後の水質対策としては、水害対策同様、汚し放題の水の後処理だけを考えるのではなく、水が持つ本来の自然の循環サイクルをとり戻し、また川が持つ本来の自己浄化作用を取り戻す方向で進めるべきであろう。

もともと東京の都市河川の水源は、関東ローム層の台地の崖からの湧水によるものが多かったのであるが最近では地下水位が下がって湧水量が極端に少なくなっているようだ。

神田川の水源である井の頭池の水ですら現在は自然の湧水ではなく、ポンプで深いところから汲み上げている。

水害対策のところで述べた保水や湧水の考え方は地下水位を上げる対策にもなる。

しかしこうした地下水も現在では地面の下を縦横に走る下水道や地下鉄のトンネルに流れ込むものがかなりあるようだ。五反田駅付近の目黒川へ都営地下鉄のトンネルへ湧き出した水を放流しているところがある。

神田川の上流には、護岸の強度に影響しない範囲で、川底の一部を砂利敷にして、水の湧き出しやしみ込みを工夫した例がみられる。

呑川にもそれらしいところがある。呑川でもみられるが、多くの都市河川では川の所々の河床に段差をつけたり、せせらぎを作ったりして、川の水を空気に触れさせ自己浄化を図っている。

野川では二子玉川付近で多摩川に流れ込む水をすべて多摩川の河原の砂利を通して浄化して

いる。礫間接触酸化法と言って、砂利の持つ水の浄化作用を利用している。

森ヶ崎処理場は大田区をはじめ目黒区や世田谷区など極めて広範囲の下水を処理している。

もっと上流の目黒区や世田谷区に小規模な処理場を設けて、その処理水を呑川に放流できないものか。また団地や大工場の下水は以前のように自前の浄化設備で処理するようにしたらどうか。

もちろん水質についての指導や費用負担への配慮はするものとする。下水道建設には莫大な支出が必要である上、下水道に危険な物質が捨てられても目に見えないのでわからない。

使った水の後始末はすべて行政任せという考えでは、住民に水質浄化の意識は育たないし、土木関係の財政も破綻してしまう。

また現在の下水処理法では有機物の処理はできても、危険物質の処理までは手が回らない。

なお物事はすべてうまくは行かないようで、川の水がすこしきれいになるとユスリカが大量に発生したり、水鳥の糞で汚れたり、大量の藻が発生するという苦情もあるようだ。

目黒川や石神井川の中流域にはユスリカ退治用の電撃器が多数設けられているし、呑川の曝気装置も藻や貝が付着して故障が多発するとして、平成9年度には撤去されてしまった。

呑川の中流域にはゴミフェンスが設置されている。空き缶の投げ捨てが多いが、このようなものを設置しなくてはならないのは恥ずかしいことだ。

家庭で使い残しの油を下水に流さないような一寸した心使いもしてほしい。

呑川と親水・結言

「呑川の会」会員から寄せられた呑川についてのレポートです。

(1997年4月記述)

このページは「呑川とは」の第五パートです。

戦後の復興期は流域の宅地化が進んだ上大きな台風もよく来襲し水害が多発するようになったので、行政は水害対策を最優先に考え、流域住民もおおむねそれを支持した。

既に川沿いまで家が建っていたので、土手を削って川幅を広げ川底を深く掘り下げて大量の水を流せるようにし、垂直になった護岸は崩れないようにコンクリートでがっちり固められた。また水の流れの支障となる水草などが生えないように川底もコンクリートで固められ、河川工学的に効率のよい3面コンクリート張りの川ができ上がった。

下流の感潮域では、当時地下水汲み上げによる地盤沈下もあったので、高潮対策のためコンクリートのカミソリ堤防が築かれた。垂直な護岸で川底は深く落ちると危険なので、川沿いには人が近づかないよう高いフェンスが張られた。

またカミソリ堤防は人の背丈よりも高く、川面は見えなくなってしまった。

こうして川と人との接触は次第になくなって行ったと思われる。

高度成長期になると流域の宅地化はますます進み、川は専ら下水を排水するための水路と化し、悪臭さえ放つドブ川になってくる。

やがて下水道が普及し水が流れなくなると、川は排水路としての役割さえ終わったかに思われてくる。

こうなると川は無用物扱いされ、折しも高度成長期の産業基盤整備の一環として、川の上に高速道路を作ったり、あるいは暗渠化したり埋め立てたりして道路や資材置き場になるケースが多くなった。狭い都市にあって川は行政にとって最後に残された唯一自由に使用できる空間でもあったからだ。

かつて江戸時代舟運に盛んに利用された日本橋川は、川の上に延々と続く首都高速道路が設けられ、由緒ある日本橋の道路元標も現在は暗い高速道路の下にある。

渋谷川の一の橋公園も水をテーマにした立派な公園ではあるが、高速道路の下なので何となく落ち着かない。

また流域住民も悪臭のするドブ川をそのままにしておくよりは、蓋をするなり埋め立てるなどして緑道公園にでもすることを望んでいたと思う。

呑川でも上流の世田谷区や目黒区を流れる部分は下水幹線とし、その上は桜並木の続く緑道にしている。

しかしこれでは川が本来持っている水とのふれあいや上に広く開いた開放感といった特長はない。その点大田区を流れる部分は川面がみえるようになっているので救われる。

石油危機後低成長期になると、行政も住民も経済効率一辺倒でなく、自然環境にもある程度配慮するようになってきた。

江戸川区の古川親水公園などはその第1号とも言うべきだろう。

呑川でも世田谷区や目黒区の上流部は桜並木の続く緑道になっているし、大田区を流れる中下流部もあちこちに化粧煉瓦を敷き詰めた並木の続く散策路が作られ、殺風景なフェンスもこげ茶色の落ち着いたものに付け替えられた。

また旧洗足用水には湧水を利用したせせらぎが作られ、旧呑川の河道には緑道が作られ、河口に近い新呑川橋のもとには傾斜がゆるやかな護岸の親水公園も作られた。

更に池上橋の上流には川底に水鳥が止まるための石や魚が住むための窪みが作られたりしており、かなり親水を意識した設計になっている。

大田区では呑川全体を一つの軸として、ふれあい公園、緑の散策路、橋などの整備を行う一方、水源の確保も行い、緑のネットワークを作るという呑川緑道軸構想を打ち出している。

神田川の上流では、川底の水の流れを蛇行させたり、せせらぎを作ったり、両岸に水草を植えたり、いろいろ工夫しているが、やや人工的な嫌いがある。野川は幅広い河川敷が一面芦などの水草で覆われ、昔の小川の雰囲気だったが、大雨のあと見たら一面水草が横倒しになり、ゴミがあちこちに引っ掛けて少々見苦しかった。目黒川の大崎ニューシティ付近のコンクリート護岸には青々としたつたが這わせてあった。隅田公園付近も一時カミソリ堤防になり川面が見えなかったが、最近堤防を広くして傾斜のゆるやかな護岸にしたので、再び川面に近づけるようになった。また車の通らないふれあい専用の桜橋も作られていた。

都市の川に田舎の川と同じ自然環境を求めるのは無理であろうし、川の土木工事の財政負担にも限度があるだろう。

住民と行政とが本音をぶつけて話し合い、どこかで妥協点を見出して親水対策は進めざるを得ないだろう。

結言

以上呑川から東京の川について水害・水質・親水の面からいろいろ考えてみた。

まず戦後の復興期には、流域の宅地化が進み、以前は発生しなかったところまで水害が及ぶようになり、行政も水害対策だけで精いっぱいだった。

次いで高度成長期に入ると川は家庭や工場からの下水の排水路になり悪臭を放つようになる。また下水道が普及すると川は枯渇化してくる。もはや川は無用なものと考えられ、暗渠にしたり埋め立てたりして道路などの産業基盤が次々に作られた。

やがて低成長期になると、経済成長優先から自然環境にも配慮がされるようになり、川が見直され川沿いに緑の散策路があちこちに作られた。

その時代時代により住民や行政の川に対する価値観が変化して来たのだと思う。水害や悪臭がそのままでは親水どころではないが、今後の川に対する施策は、水の持つ本来の自然の循環サイクルや川の持つ本来の自然の浄化作用などと調和する形で進められれば理想的だと思う。

川を人が征服するのではなく、川と人が共存するという考え方である。

呑川は大田区の真中を流れるシンボリックな川である。50年近くも呑川のそばに住んでいると、不思議なもので愛着も湧いてくる。

行政も呑川を中心とする緑道軸構想を掲げているが、呑川が更に区民の良い憩いの場となることを期待している。

講座(大田区立池上文化センターで行われた「呑川から東京の川を考える」区民講座)は終了したが、引き続き「呑川の会」として都市河川を考える場は残った。

講座(大田区立池上文化センターで行われた「呑川から東京の川を考える」区民講座)は終了したが、引き続き「呑川の会」として都市河川を考える場は残った。

これからも都市河川について勉強し、微力ではあるが区のためにお役に立てればと思っている。今回は有意義な講座を企画していただき、心から感謝している。

平成9年4月

<参考文献>

1. 「都市と水」 高橋裕著 岩波新書
2. 「都市と川」 三木和郎著 人間選書
3. 「神田川」 東京新聞社会部編
4. 「河川シンポジウムからの提言:都市河川を知る」 地域交流センター企画
5. 「都市河川計画の手引き―洪水防御計画編」 国土開発技術研究センター発行
6. 「だれにもわかるやさしい下水道の話」 本間都著 北斗出版発行
7. 「2万分の1地形図(東京近傍南部)」 明治19年製版 陸地測量部発行
8. 「5万分の1地形図(東京西南部)」 昭和42年編集 国土地理院発行